



バン格拉デシユに恋して

私たちにあまり馴染みのない南アジアの国、
バン格拉デシユを紹介します。

vol.10



【素晴らしい出会い④】

私には『Rosemary de Bangladesh』ブランドでバッグやエプロンを作るのをずっと支えてくれている大切な仲間達がバン格拉デシユにいます。通訳のラクブさんとパタンナ一のロブさん、そして工場の若いスタッフ達です。

バン格拉デシユの公用語はベンガル語で、ロブさんや工場のスタッフ達はワン、ツー、スリーといった英語さえ上手く理解出来ません。ラクブさん不在時の私達の会話は犬と猫のような摩訶不思議なものだと思います。でも人間って凄いなあと思うのはお互いを思いやる感情があると通じてしまうこともあるのです。

帰国が明後日に迫った日の夕方、日本に持ち帰る予定の製品が全然出来てないのに、工場のスタッフ達はベンガル語で「早く早く〜！」と、催促するオーナーの縫製ばかりを優先し、私の物はほとんど後ろに追いやられてしまいました。仕方なく私は後片づけをしながらチラチラみんなを見ていると一

人の男の子が近寄って来てこう言うのです。「大丈夫。僕達は残ってあなたの製品を仕上げるから」。この工場は残業代が出ない事を知っているので半信半疑でいると数名の男の子達とロブさんが私の生地を持って来てミシン掛けを始めました。「本当に?」「大丈夫?」と思っている私に「あなたはいつも優しくしてくれたから」「あなたはいつも僕たちにおやつを買ってくれたから」「あなたは僕達を本当の友達と思ってくれたから」「だからあなたの為に僕達は絶対仕上げるよ...」。

神様が降臨したかのよう
にベンガル語が理解出来た
あの瞬間を私は今でも奇跡
だと思ってしまうのです。



大切なバン格拉デシユの仲間達



作るのが大変だった丸いボ
ーチ(写真下)

鶴田 素子さん

八代市のローズマリー紅茶店オーナー。50歳で大学院に再入学し、
開発経済学を専攻。途上国の貧困削減のためフェアトレードを推進する。

ご感想お待ちしております!

info@uki-pre.net